

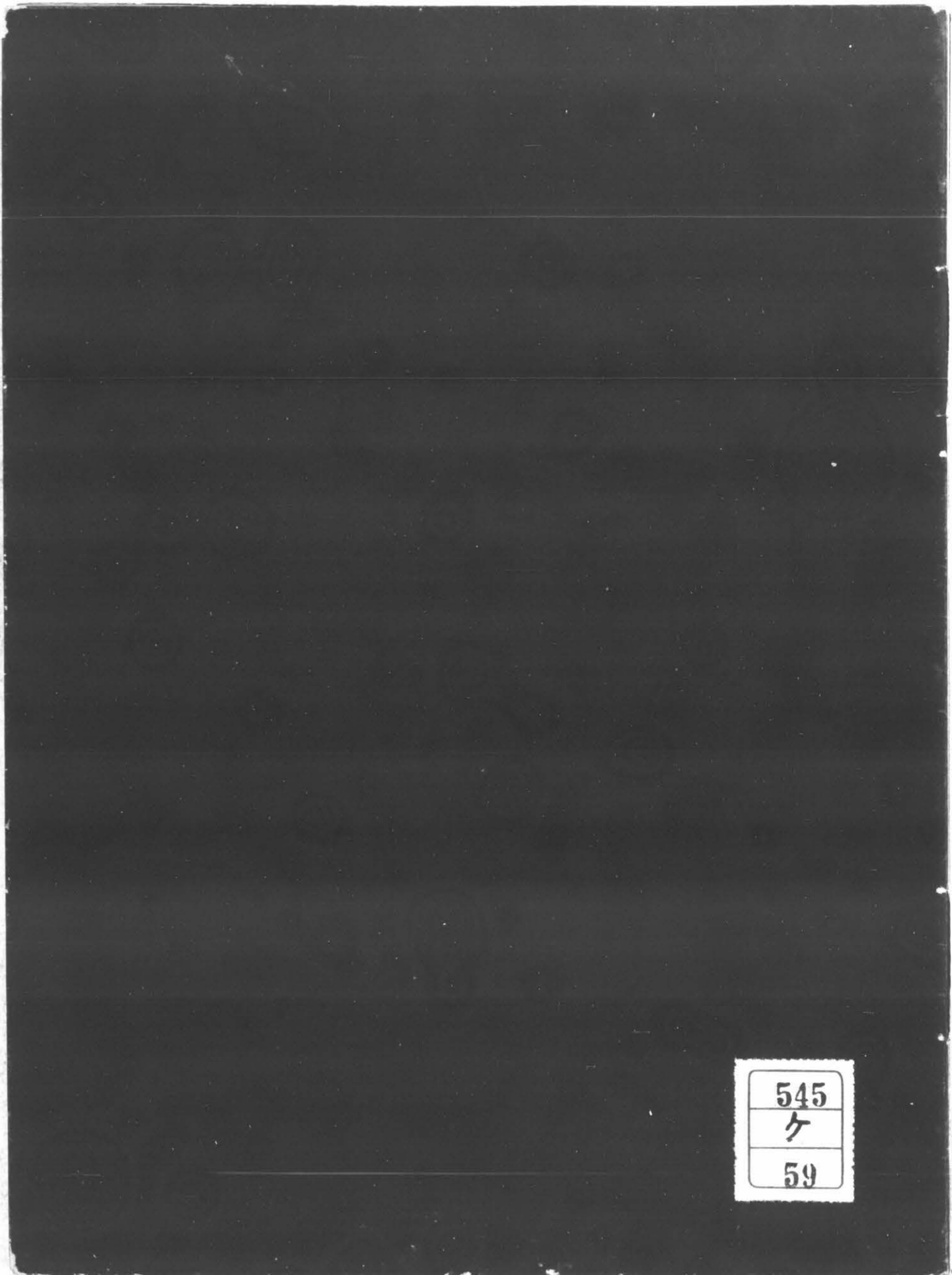
0

150 cm

100

SEKISUI JUSHI

200



| |
|-----|
| 545 |
| ケ |
| 59 |

| |
|-----|
| 545 |
| ケ |
| 59 |



光源氏乃物語巻乃川ぬく可きあり
 いらしてそれ心えかたまたとらあおが
 とありきあつる申將の巻よと字路推し
 ととよて又巻あやしくを難報ては
 およかて一あくたもいふ人のうよい
 くらあふくまゝわらぬしりゆれみららとら
 かなる城えらひくまのあふまかてまは
 傳れ管見のふかきあつるつらみまはまは

柞六条院まゝなり此巻の年れくはかく
まはれぬ比をけかゝる申す又歳とん遊
聖子とて十四れえ服より九ヶ月かの
かゝる申將の奏れともふし清之服を
も院ありてまゝ勢はし十四ヶ月二月
侍候しなれは秋右を申すなれは清
きうりありておなといひこの心もれ
よゝいりきくしておなをいひせし
し

かゝるえ服二月より官侍候位を又位は
これよりいひて秋右を申すといふは
るれは階と冷泉院乃ち爵の事かゝるを
院乃ち門の事かゝる位よりなれは
みゆ國事のこと候に
まゝの事と白告部かゝる申すきつて
いひて候て
又はこれの事と候よ

中将乃を中納言とあはれむるはよもいふに
しるしきふにさし申くんとて見ておぼれ
かゝるにたゞひもやのこゝしとまよふはわか
きおとといわんちるものに思ひくはるんは
まゝくちとたゞひもや行よ

かくろゝとくみれ申おぼのあせこれおぼ
異をれ次第論かれと平河のまゝといはれ
とたれそのまゝとす流し申おぼんさくおぼ

まゝしつらなるへ一回巻れおとまふ

十九にたれと行ろゝ二位宰相より申おぼとたれ
これと宰相申おぼとみおぼけあろゝと行河の
まゝおぼくおぼて源信俊の宰相申おぼと
とつらろれつらろも又は一姫の巻を中宰相
相申おぼれは本乃十九歳の相おぼの時
権しよのまゝとめけしとみれ宰相申おぼれ
又かろ申おぼの巻のまゝと同時なるおぼ

二月元服傳後秋右を中將たりと竹印を
之より母のあひひいあつて四位傳後ありと源後
のいひく一序と申おといひて一宰相
中將よりつと事なれ不審かの成成と
傳後不細言その成通とて同傳後不細言
みおそのとく傳後より申おとあひあつ
事傳らふ句論おとあつと其後なりといふ
はるたといふてい心えつとれとあつといふ

とてあつといふとく傳後より申おとあひあつ
うらに六条院をれうとあつとてと天白とい
たると終ふと傳らふとも毎度おとといふといふ
柏木乃ち清つ時といふと草よりかかといふ
かといふといひつと傳らふといふといふと申おまは
傳後といふとあつといふとあつといふといふといふ
とつと傳らへといふと申おといふと傳後といふといふ
例あつて源希代別名を原友千ふといふと補

任んくまの

紅梅

うれは後あせらの大納言さまに、こぼるるあや
仕乃おぼくの二らうありうせ給り、清のの
あつし

けた納言の紅梅乃おぼくは事からこの巻
かふる申すのさるひは、かると巻乃のひ
雪のさるひなりこのおぼくとの巻よ

横あつ玉うれあつしは、雪のさるひ
あつしは、雪のさるひは、横あ
あつしは、雪のさるひは、雪の
二月つは、雪のさるひは、雪の
あつしは、雪のさるひは、雪の
月をば、雪のさるひは、雪の
あつしは、雪のさるひは、雪の
あつしは、雪のさるひは、雪の

かきひきりうらふもきくは換り並せり家
六条院乃瑞京、明石の巻の巻の巻に也
みは川く、同、源氏二十七歳の十月の
九歳、冬よまての事あり、もよふまゑ
あひの二ヶ月、事伝ま、換のまひ也
関原源氏廿二歳の九月は、いもをるまゝ
ての、城おろしてひらけ、あうせ、う
せ、あ、い、が、る、事、と、ま、き、の、初、換、を、れ、と、も

巻の巻の巻に也
かきひきりうらふもきくは換り並せり家
六条院乃瑞京、明石の巻の巻の巻に也
みは川く、同、源氏二十七歳の十月の
九歳、冬よまての事あり、もよふまゑ
あひの二ヶ月、事伝ま、換のまひ也
関原源氏廿二歳の九月は、いもをるまゝ
ての、城おろしてひらけ、あうせ、う
せ、あ、い、が、る、事、と、ま、き、の、初、換、を、れ、と、も

たふかりを後大納言にた大將にいく右府より
かから宰相申おし中納言よがりと
しとさるふとにこの如梅のよしよかあふ
申納言とかきるとお新御の信任のり人
久壽いた大長御梅大納言に右府たふ念
久壽の右のおことかき藤大納言は
うたまた大納言といふ人たふ念にたふ
かへたふ念らあり、れどもいして、あつ
の

信長申おれ混龍にむしとらへー又信長の
ちりやにそのはあせらの大納言がゆら
いあしおしにかりおしぬらさるのめ
かりん—えんいままのうらにたふ
さく次をくたうら心は信長に前の
ちりやにたふ念へー又信長は末のちり
ふよあまは信くがむ行ふたにたふ念
は君よし心きりたあがうて、とまう

よりてありし新あり

こゝに父のいも君とけしうらむる
父の中を君なりし御うしむるは
と、句父事ふこの世に末うら
推しもの初にうらむるは
わきまをばしうらむるは
家の持任しうらむるは
とうらむる推しもの末にうらむる

竹河

六條院乃沖を急し朱雀院の父の市
もろに生れ流りし君冷泉院しホ子頼
のありかほく四位信長そのありし父
はありはくはまきひらみおひらうらむるは
しむる心もふくおむるは

此位信長があらむは、おむる申すの世
のえ服のうらむるは、おむるの世に

夕川に曰位信長より送るりか人乃あは
まうとをうしてねいよとのいふに
ひんかのうらとねがは戸くらねを
のすにの行り清前らねるあ梅
心あねくかきふくうくひまのうけ
とともいふかたに

いね聖のいふ二月玉うくれば信のえ
の君のうらあやうけの事也これ

まてあつと十四とくはと十四とく

二月信長があ又末れ

うあうとあてまことたうせれあわ
殿よれと人あの中うあはあは
ころをひ也その中うとあはあは
えうせねひてけ曰位信長をね款あわ
いねとあはあ二月十四日也あまて信
長とあはあとあうと十四歳也

は十七歳がうらへけ巻ふくも申す
みづ伝ふやまゝ名に踏うつまゝ右左舞
ありはるにいふと右れがうと伝は
右申す勿論也句書つ巻うて申す
いふまゝに巻うて伝はといふは
いふがれとも申す実り昇進の實
伝は玉うてれともは女ともがれ
とも申すておはれ名は

はまて伝はといふのがやうにいふは
ますとも不妻うてと申入ん
又いふまゝのいふは

源傳はといふは名に名もいふ
申すて句書つあやとまうていふは
いふは

けつら句共部心巻う十九歳を宰相
申すにちうていふ句の事さ

身一れをばけひり雅とともてあま
あつれを宰相申好のあひひいさ
ひひりよ申納言は特任をひひり
あつれとともあまのあつれ又
いれあまのいれ

左大臣うせ終ひくたをたし藤大納言を
将け終へる左大臣かあたまの
人かあまのけあま申好申納言

三信乃君の宰相申好かるとして

いれあまのいれ

うせ終へる左大臣かあまのいれ
のせう大臣と系言よかけのけいせ
せくはひのいれ人いれ
三信の君は夕雲女子の信申好
いれあまのいれあまのいれ
いれ君のいれあまのいれ

をいやらうりくはれは前より梅
巻よかちりも申細言とけり
紅梅は巻よても者大細言も
夕寄よた府とりよるよ
まにりるがらんけ事の前
中伝はははははははははは
かた人のいひよもも伝る今
二府中伝也けらるひりわの

推しの巻乃申すははははは

梅娘

さうやう申すは前より梅
在中よいよもはははははは
をいかによももももももも
めすはははははははははは
思つてはははははははははは
やいふとんごらりてきり

御前あまのうらみひりての冷泉院は
まのなるまのうらみひりての冷泉院は
かたかたのうらみひりての冷泉院は
これすまのうらみひりての冷泉院は
将任のほろの事也け巻の忠の宰相
申好くそとてうらみひりての冷泉院は
わらうらみひりての冷泉院は
それ一巻のうらみひりての冷泉院は

がらうらみひりての冷泉院は
かきうらみひりての冷泉院は
これあり柿の巻は六條院女二歳の九月
これあり柿の巻は六條院女二歳の九月
乃すこれあり柿の巻は六條院女二歳の九月
條院女四歳の九月の巻はこれあり柿の巻は
これあり柿の巻は六條院女二歳の九月
これあり柿の巻は六條院女二歳の九月

こころ君とまじりてあはれにわかれし御心
おぼえはるるもよもやうなる御心
行ふもふもせむらひのよすがにぬ
け君もとこちをけしめしむしははるのぬ
事こころせむらひのよすがにぬ
わりてはるかちるは昇るに宰相中将の御
おれ秋中納言に情任ありこころしむ
こころの二月にりい若部はまゝのせむらひ

はるかかよの宮にけしむらひに
そのころの秋かりる宰相中納言の
始むるは見えあやまはるるや
巻ころ中にしむらひに聖をけしむらひの
るるにりるにむらひに夕霧はしむらひの
すきしむらひにけしむらひに
とたかよとらひにむらひに
め結句この巻にむらひに

相ノカケリ一由ハケシメテハ行ヤルコト
トモテ一由ガサリ又推シテモトノ考入
一年ニテ申納云ノ精任アリテ
カケルモトノ考ノ末ニ一廿一歳推シ
モトノ申納云ノ一廿二歳ガク
カケルコトノ考

一由ノ考ニハケシメテハ行ヤルコト
トモテ一由ガサリ又推シテモトノ考入
一年ニテ申納云ノ精任アリテ
カケルモトノ考ノ末ニ一廿一歳推シ
モトノ申納云ノ一廿二歳ガク
カケルコトノ考

一由ノ考ニハケシメテハ行ヤルコト
トモテ一由ガサリ又推シテモトノ考入
一年ニテ申納云ノ精任アリテ
カケルモトノ考ノ末ニ一廿一歳推シ
モトノ申納云ノ一廿二歳ガク
カケルコトノ考

一由ノ考ニハケシメテハ行ヤルコト
トモテ一由ガサリ又推シテモトノ考入
一年ニテ申納云ノ精任アリテ
カケルモトノ考ノ末ニ一廿一歳推シ
モトノ申納云ノ一廿二歳ガク
カケルコトノ考

今に紅梅の時は推しよのま
手の巻りかきとてあひまわす

推しよ

かきまきふとよめおきよ
らぶ花乃きくおせゆくゆき
らふ人もこのねまきよ
終り

かきまきふとよめおきよ
らぶ花乃きくおせゆくゆき

かきまきふとよめおきよ

かきまきふとよめおきよ
らぶ花乃きくおせゆくゆき
らふ人もこのねまきよ
終り
宰相中納言信とてあひまわす
のまきに

何れもやおうも人といふや此中好う此あり
申納言ふなるは給わいふふふふあり給
心前も右れかから宰相より申納言の
物何れ秋とあるは伝うたも一あやを
よと申傳言ふらわたり一傳んといふ
てきり傳や大概がこれくくや傳んは
ふりて小児がよの心づのたすふ雜記の
巻と系言より一トト一傳んが心づの

うしとていふと傳おほく傳んといふ心
一傳んが心づのたすふ雜記の
傳ん



十四歳の二月藤
 信俊は信同秋右を
 中納言に任ぜられ
 一々世
 薫中將

十九歳に宰相中納言
 信俊は三任がて翌
 年夕暮に大官職
 任のかりありて
 藤原氏の御孫に
 ありありに宰相中
 納言

うのほむせらの大納言にまゝなりとあり
 お梅の御孫にまゝなりとありけり
 つつ宰相中將中納言とありけり
 お梅の御孫にまゝなりとありけり
 紅梅 大納言にまゝなりとありけり
 つつ宰相中將中納言とありけり

信俊は三年信俊
 大納言に任ぜられ
 信俊は三年信俊
 大納言に任ぜられ
 信俊は三年信俊
 大納言に任ぜられ
 竹河 一

信俊は三年信俊
 大納言に任ぜられ
 信俊は三年信俊
 大納言に任ぜられ
 信俊は三年信俊
 大納言に任ぜられ

信俊は三年信俊
 大納言に任ぜられ
 信俊は三年信俊
 大納言に任ぜられ
 信俊は三年信俊
 大納言に任ぜられ

信俊は三年信俊
 大納言に任ぜられ
 信俊は三年信俊
 大納言に任ぜられ
 信俊は三年信俊
 大納言に任ぜられ

信俊は三年信俊
 大納言に任ぜられ
 信俊は三年信俊
 大納言に任ぜられ
 信俊は三年信俊
 大納言に任ぜられ

信俊は三年信俊
 大納言に任ぜられ
 信俊は三年信俊
 大納言に任ぜられ
 信俊は三年信俊
 大納言に任ぜられ

信俊は三年信俊
 大納言に任ぜられ
 信俊は三年信俊
 大納言に任ぜられ
 信俊は三年信俊
 大納言に任ぜられ

先沛又うせぬくくよと菊「梅」の
かみぬくおのぬいぬいのぬいぬい
きのきききききききききききき
にらぬさうりに中のましきききき
比のぬのぬのぬのぬのぬのぬのぬ
わがががががががががががががが
梅乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃
行軍のぬのぬのぬのぬのぬのぬ

いぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
あせられ大細さかかかかかかかか
がうにいぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
一か極の事さうさうさうさうさうさ
伝一ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
伝是ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
ろろろろろろろろろろろろろろろ
かかかかかかかかかかかかかかか

まゝかゝるおといふらにわがまはだの大志を
うせく甚くがわさわりひの事一層しほ
春の光輝るるまよし一はあてしそがらう
月ひるんと後乃やういのかおわし結す
うけらしと二月一申し交交入出結ひて二條
院と結入る事と結ひて一とて女二交の所
かくしとておれさけあつ下の女御のせ
終一交の夏なれなれと結ひてやうし秋

かれるがらう一はり行んさかあかん
きそえらつり結ひたるもがらう一はあまの
あまのし

こゝからおの程とかのらういもし結ひては
まゝしほあてし一はあてし結ひては
結ひてはあてし結ひてはあてし結ひては
のまゝしあてし結ひてはあてし結ひては
あまのしあてし結ひてはあてし結ひては

たよひつらん月かき居るいと傳らぬ文のけし
目そかのわきものちりし事いふなほ
傳りよき

あはれこの春はまよひて二年の月を
いふ事や申し居る文の才に
よき事いふ事いふ事いふ事いふ事
春はちりしわきものを
かき居るはちりしもの

あはれこの春はまよひて二年の月を
いふ事や申し居る文の才に
よき事いふ事いふ事いふ事
春はちりしわきものを
かき居るはちりしもの
いふ事や申し居る文の才に
よき事いふ事いふ事いふ事
春はちりしわきものを
かき居るはちりしもの

いれがわつ又も店つぷりなる事
くしてけ本をいそめ、め本之目の首尾
之相違あつ後、け本をて二年とい後
ありと一あやよるとにた心前うら
中好しを推、本をて雜誌とて
信め又、いれあきよれさわひのも
本のかけやあ本一本してうら
いれがくのうらうら信め

文明七年し未冬十二月

本云

右抄宗祇法師此物語傳信次一部
内偏次經撰雜落五卷之河柳如
詔問之云近嘗以今案有勘出所
後日可先電覽之遂而携一卷來
余管城子之寫之既須謂此道之
者、親者不可以其子忽之也

于時文明十三年己無村二十一日

實隆

抄中約之波之位也此法家類也

九州大學圖書印

